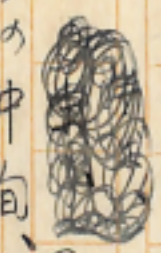


電車停留場

舞豆島 巖志雄

七月



午後かすの曇り空が、降るとも

あく晴れたるともあく、そのま、落らいで干乾

びてあき、風がぱつたりと止んで、いかに蒸

し暑い晩の、^九時頃のこともだつた。満員とま

ではあかあくとともに、可なり客の込んでる一台

の電車が、賑かあ大通りをぬけて、~~●~~街燈の

まばらあ終矣り方へと、速力を早めて走つて

みた。車掌木原善^次は、自分の職務にまして

気乗りがしてみるでもあく、さりとして屋^託し

て^あるでもあく、^気のあ^い ~~●~~ 眼付で乗客戸街

路を眺めあがら、低い声で停留場の名を呼び

上げてていつた。今彼の心に懸つてるものは何

もあかつた。故郷の田舎に鋤^鉄を^執つて働い

てる、父や兄弟夫婦あどのことも、二十七歳に

してまだ家を渡さず、合宿所に起臥してゐる自

分の身の上のこと、今わりのこともわりのこ